アートの時間
3時間目

わかる、参加してこそ その魅力

豊中市では、毎年秋から冬にかけて「とよなか音楽月間」をはじめ、暮らしに彩りを添える様々な催しが行われます。観るもよし、聴くもよし、参加すればなお楽しい。
そのなかから、ひときわ輝きを放つ、豊中ならではのワークショップ2つをご紹介します。

豊中アート
社会見学
～体験編～

いつものまちが違って見える

□きむらとしろうじんじん　野点□

平成27年6月20日～11月15日・7回開催、本番11月19日・23日

焼きたてのお茶碗で抹茶をいただく

出来上がりを想像しながらお茶碗の絵付け

きむらとしろうじんじんさんの野点（のだて）は、自分で絵付けした焼きたてのお茶碗で、お茶を楽しむ移動式カフェ――旅まわりのお茶会。ドレスに身を包んだじんじんさんが窯の前に現れると、何気ないまちの空間が、えも言われぬ楽しさに満ちた場所に生まれ変わります。

じんじんさんは、大学で陶芸を学んだあと、アーティストなどが集うコミュニティ・アートセンターの運営に関わったり、HIV/AIDSの啓発活動に身を置いたりした時期に出会った人々から大きな影響を受けたと言います。**「そこで行われていたことは、それまで自分の身の周りにあったどんなものよりカッコよかった」**。そんなときに、頭にポンと浮かんだのが、**「リヤカーに窯を積んで、路上で茶碗を焼く」**という情景。これまでの自分の経験が全部詰まったこの景色はあまりにも魅力的で、矢も楯もたまらず実行してみたら、言葉に表せないおもしろさ。その感覚は今も変わらず、“魅力の予感”だけを頼りに始めた「野点」は、もう20年以上も続いています。

「野点」では、11月の本番に先だってサポートスタッフを募集。6月から8月の6日間、みんなでまちを歩き、「野点」にぴったりの場所を探しました。今回関わったサポートスタッフは延べ61人。昨年に続いての参加や、遠くから新幹線で参加した人も。**「スタッフで参加することこそがおもしろい」**という言葉が聞かれるのは、みんなで「野点」の現場をつくることに楽しみを見出しているから。**「陶芸に興味があって」「お茶の作法にとらわれずに楽しめそう」**など動機はいろいろ。

お客さんも**「じんじんさんの立ち居振る舞いが美しい」**と言う人から、**「何かおもしろそうでのぞいてみた」**と言う人まで様々。**「なかにはつまらんと思う人もいて当たり前。どんな反応でも受け止める余地を大切にしたい」**（じんじんさん）。ひとつとして同じ「現場」はありません。人と人、茶碗との出会い、その場所がもつ空気、それらがすべて合わさって、その日の「野点」が生まれます。まさに「一期一会」。そのかけがえのなさを気づかせてくれるのが、じんじんさんの「野点」です。

きむらとしろうじんじんさん

豊中アート
社会見学
～体験編～

越境するシンフォニー

□野村誠×日本センチュリー交響楽団
世界の庄内音楽ワークショップ□

平成27年12月3日～平成28年1月17日・6回開催、発表会1月23日

野村誠さん　和洋楽器による混成オーケストラ

日本センチュリー交響楽団は、国内外で数多くの音楽ワークショップを手掛ける作曲家の野村誠さんを迎え、これまでのオーケストラの枠を超えた取り組みを実践しています。そのひとつが庄内での音楽創作プロジェクト。地域の活性化に取り組む「しょうないREK」と協働で、音楽を通して人と人の豊かなつながりをめざします。2回目の今回は、大阪音楽大学邦楽専攻の教員や学生も参加しました。

野村さんが進行役を務める6回のワークショップでは、小学生から70歳代まで世代を超えた43人の参加者が、三味線や箏、ヴァイオリンなど、和洋様々な楽器の中から好きな楽器を使って、自由な発想でリズムやメロディを創り出します。野村さんがそれらを取り入れた曲を制作。みんなで演奏に挑戦しました。

発表の場となった「世界のしょうない音楽祭」（1月23日）では、一人ひとりの熱演が観客の心をとらえました。

野村さんとともに、ワークショップの企画運営にあたった大阪音楽大学の井口淳子教授は**「野村さんという稀有な作曲家、西洋音楽のプロ演奏家集団、そして邦楽指導者や若き邦楽家たちとアマチュアの一般参加者が、一緒になって音楽を創り上げる作業は、まさに画期的な取り組み。そこには、プロ・アマ問わず“西洋と日本の音を再発見する驚きと喜び”があったと感じます。交響楽団と音楽大学を擁する豊中だからできた企画です」**と、その魅力を語ります。

「コミュニティプログラムは、オーケストラの新しい価値を創造する試み。オーケストラのもつ可能性をもっと社会や地域に還元したい」（野村誠さん）。**「市民のみなさんと一緒に音楽を創るにあたり、どうすれば全員が自分の個性を発揮しつつ合奏団として一致団結できるか、楽団員と何度も話し合いました。そこから新しい発想も生まれてきました」**と話すのは、日本センチュリー交響楽団マネージャーの柿塚拓真さん。

「洋楽と邦楽」「プロとアマ」「演奏者と聴衆」「大人と子ども」。「世界の庄内音楽ワークショップ」は、そんな垣根を越えて、参加者全員がオーケストラのメンバーとなり、「音を楽しむ」という音楽の本質を堪能できる機会です。

参加者の声

「毎回参加するたびに少しずつ曲ができていくのがおもしろくて、楽器経験のない私でも楽しめました」

「親の介護で疲れ切っていた私には癒し効果絶大。参加するだけで気持ちが軽くなって、体まで楽になりました」

「3人の娘と家族全員で参加しました。演奏でみんなの気持ちがひとつになった充実感でいっぱい」

楽団員から楽器の扱いを教わる

初めての楽器にふれる